ギュスターヴ・フローベール研究（3）

大　貫　　徹
外国語教室
（1992年8月24日受理）

Une Etude sur Gustave Flaubert (3)

Tohru OHNUKI
Department of Foreign Languages
(Received August 24, 1992)

Emma Bovary, héroïne de *Madame Bovary*, refuse certainement le réel, mais elle est trop profondément attirée par lui pour vivre en pure gratuité dans le monde de son imagination. Effectivement, elle ne peut pas vivre ses amours comme de vraies amours livresques: toujours elle doute, s'inquiète, elle essaie de se rassurer sur la réalité de son rêve, et elle tâche pour cela de le vérifier dans la vie. Bref, elle fait des expériences. Ces expériences, c'est dommage, finissent mal, et elle éprouve de grandes désillusions. C'est en somme pour ne pas avoir complètement cru à sa rêverie romanesque qu'elle, toute désespérée, s'est finalement tuée.

D'autre part, Don Quichotte, héros bien favori de Flaubert, ne doute pas que les moulins à vent ne soient de vrais géants: il ne fait pas d'expérience, il n'éprouve pas de désillusion. Bien contrairement à ce que l'on imagine, Emma n'est pas une autre don Quichotte.

C'est ainsi qu'il faudrait voir en *Madame Bovary* bien moins le procès de l'illusion romanesque (donquichottesque) que celui d'un romanesque incapable de soutenir jusqu'au bout ses illusions. Dans cette étude, nous allons tenter de mettre en évidence cet aspect de ce roman, en examinant minutieusement le rêve d'Emma.

当論文は，名古屋工業大学紀要第43巻（1991年）に掲載されたギュスターヴ・フローベール研究（2）に続くものであり，筆者のフローベール論全体の第一章第二節に当たるものである。

序　章　　（第40巻に掲載）
第一章『ボヴァリー夫人』（*Madame Bovary*）論
——エンマ・ボヴァリーの夢の自己崩壊性——
第一節　エンマの夢がもつ意味（第43巻に掲載）
第二節　エンマの悲劇
——空虚な夢と充実した夢——（本号）
第三節　エンマの生涯
——自己埋没への軌跡——　　（次号）

*　　*

第一章『ボヴァリー夫人』（*Madame Bovary*）論
——エンマ・ボヴァリーの夢の自己崩壊性——

ギュスターヴ・フローベール（Gustave Flaubert）の名を一躍世間に広めさせたこの作品（1856年発表）に関して，これまで数多くのことが言われてきた。当論文では，夢と現実との軋轢から自殺したと一般的に言われている女主人公エンマ・ボヴァリー（Emma Bovary）の姿に焦点を絞り，彼女の夢が，現実との摩擦からではなく，むしろそれ自体で必然的に崩壊する運命にあり，こうした夢の特殊性が結局は彼女を自殺に導いていったのではないかという点を明らかにしてゆきたい。

尚，この作品からの引用は，特に断らない限り，以下のテキストからである。本文中では引用箇所のページ数のみを記すものとする。

Gustave Flaubert, *Madame Bovary*, édition établie et présentée par Claudine Gothot-Mersch, Garnier,《Classiques Garnier》, 1971. ただし，日本語にするにあたっては，『ボヴァリー夫人』（伊吹武彦訳），［全2冊］，岩波文庫，1960年を参照したが，必ずしもそれに全面的に従ったわけではない。

第二節　エンマの悲劇
―― 空虚な夢と充実した夢 ――

A．言葉の物神崇拝

再び，エンマの心の中に注目したい。そのために，まずは，拙論の第一節の冒頭にも引用した箇所[1]，すなわちエンマの心の中で生起しているものをわれわれ読者がじかに知ることになる最初の部分，作品の構成で言えば第一部第五章の末尾部分に当たる箇所に戻ってみよう。それは以下のように記されていたはずである。

Avant qu'elle se mariât, elle avait cru avoir de l'amour; mais le bonheur qui aurait dû résulter de cet amour n'étant pas venu, il fallait qu'elle se fût trompée, songeait-elle. Et Emma cherchait à savoir ce que l'on entendait au juste dans la vie par les mots de *félicité*, de *passion* et d'*ivresse*, qui lui avaient paru si beaux dans les livres. (p.36)

「結婚するまで，エンマは恋をしているものと信じていた。しかし，その恋から当然くるはずの幸福がこないのは，自分の思い違いだったに相違ないと考えた。そしてエンマは『至福』とか『情熱』とか『陶酔』とか，物の本で読んだ時あれほど美しく思われた言葉を，世間の人は本当はどんな意味に使っているのかを知ろうとした。」

この中に，「『至福』とか『情熱』とか『陶酔』とか，物の本で読んだ時あれほど美しく思われた言葉」という言い方がある。もちろん，ここには，こうした言葉が「物の本」の中で意味していることそれ自体への羨望の念があるだろう。明らかに，エンマは，こうした言葉がささやかれる場面に強い憧れを抱いているのだ。しかし，ここでは，むしろ，われわれが先に「エンマのパリへの夢」に関して既に詳述したところ[2]の，言葉の音の面での魅力，つまり音声面でのシニフィアン《signifiant》そのものの魅力にエンマがどうしようもなく捕われている様子がとりわけよく伺えるように思われる。

Comment était ce Paris? Quel nom démesuré! Elle se répétait à demi-voix, pour se faire plaisir; il sonnait à ses oreilles comme un bourdon de cathédrale [...] (p.59)

「パリとはいったいどんな所だろう。パリ！なんと大きな感じのする名！彼女はその名を小声に繰り返しては楽しんだ。それは伽藍の大釣鐘のように彼女の耳に鳴りひびいた。」

おそらく，エンマは，上に引用した「パリへの夢」の場合と同様に，『至福』とか『情熱』とか『陶酔』とかの言葉を小声で何度か繰り返しては，その「美しい」響きを楽しんだはずである。なぜならば，エンマには，言葉に対して，一種の物神崇拝《fétichisme》的なところがあるからである。例えば，以下に引用した箇所のように。

[...] le dimanche, des passages du *Génie du christianisme*, par récréation. Comme elle écouta, les premières fois, la lamentation sonore des mélancolies romantiques se répétant à tous les échos de la terre et de l'éternité! (p.37)

「日曜日には息抜きに『キリスト教精髄』の数節が読まれた。耳に快い，ロマンティックな哀愁の嘆きの声が，この世あの世へ谺するのを，最初のうちエンマはどんなにかうっとり聞きほれたことか！」

Pour goûter la douceur [de la lune de miel], il eût fallu, sans doute, s'en aller vers ces pays à noms sonores. (p.41)

「蜜月の楽しさを味わうには，名を口ずさんでさえ耳に快いあの国々へ，おそらくは旅立つべきであったのかもしれぬ。」

こうした引用で明らかなように，エンマは「耳に快い」言葉の連なりに惹きつけられ，それを口にするだけでうっとりしてしまうのである。したがって，エンマが自分の娘の名を考える際に，

Charles désirait qu'on appelât l'enfant comme sa mère [...] M.Homais [...] avait en prédilection tous ceux qui rappelaient un grand homme, un fait illustre ou une conception généreuse [...] (p.91-92)

「シャルルは自分の母親の名を貰ってつけたがった。(...) オメー氏は (...) すべて偉大な人物，かくかくたる事績，高邁な思想を思わせる名が好みであった」

とする二人に対して，当然のことながら，その響きを重視する。

D'abord, elle passa en revue tous ceux qui avaient des terminaisons italiennes, tels que Clara, Louisa, Amanda, Atala [...] (p.91)

「まず，彼女はクララ，ルイザ，アマンダ，アタラなどイタリア風の語尾を持つ名をひとわたり全部あたっ

てみた。」

もちろん，この響きは，同時に，それが連想させるさまざまな背景とも堅く結びついているはずである。先にも触れたように，エンマはこうした言葉が口にされる場面への強い憧れがあるのだ。したがって，エンマは，娘の名を考える際に，単に音の響きだけではなく，その物語的な連想にまで探索の手を伸ばすはずである。

[...] elle aimait assez Galsuinde, plus encore Yseult ou Léocadie. (p.91)
「彼女は，ガルシュアンドもかなり好きだし，イズーやレオカディーはなおのこと良かった。」

ガルシュアンドという名は，フローベールの名訳者であり，中世フランス文学の専門家でもある山田爵が示しているように，中世の物語にはよく登場してくるような名前[3]であろうし，また，イズーとは，言うまでもなく，『トリスタンとイズー』《Tristan et Iseult》物語の「イズー」を連想させる名前である。明らかに，ここには，そうした名前の人物が愛したり愛されたり，あるいは武勲を立てたり，命を落としたりしている物語世界への憧れが見られるのだ。おそらく，実際には，まず，物語の世界への強い憧れがあり，その憧れが登場人物の名前に興味を抱かせ，その結果，その名前が「耳に快く」響くように感じられるようになるのであろう。

そのため，例えば，第二部第九章において，エンマが初めて夫以外の男（ロドルフ）に身を委ねた日の晩，

Elle se répétait:《J'ai un amant! un amant!》(p.167)
「エンマは，「私には恋人がある！ 恋人がある」と繰り返した。」

というように，「恋人がある」と繰り返すことになるのも，単に《J'ai un amant》という語句の連なりから生じる音の快い響きを味わっているだけではないだろう。もちろん，そう繰り返すことで，「私には恋人がある」という事実を再確認しているわけでもない。明らかに，ロドルフという恋人を思いがけずに得てしまった今の自分に対して，あたかも，自分が物語の中の女主人公であるかのような戸惑いや喜びを表しているのである。事実，この一節は，以下のような前後に挟まれている。

Mais, en s'apercevant dans la glace, elle s'étonna de son visage. Jamais elle n'avait eu les yeux si grands, si noirs, ni d'une telle profondeur. (p.167)
「しかし自分の姿を鏡の中に見たとき，エンマはわが顔に驚いた。目がこんなに大きく，こんなに黒く，こんなに深々としていたことはついぞなかった。」

Alors elle se rappela les héroïnes des livres qu'elle avait lus, et la légion lyrique de ces femmes adultères se mit à chanter dans sa mémoire avec des voix de soeurs qui la charmaient. Elle devenait elle-même comme une partie véritable de ces imaginations [...] (p.167)
「そのときエンマは，かって読んだ書物の女主人公たちを思い出した。これら不義の女の合唱隊はどれも姉妹のように似かよった声でエンマの記憶の中に歌い始めた。その声はエンマを恍惚とさせた。エンマ自身もこうした空想の女たちのまぎれもない一部となったのだ。」

つまり，「私には恋人がある」と繰り返すことで，エンマは，それを単なる事実の確認としてではなく，あたかも，それがひとつの引用であるかのように，言い換えれば，「かつて読んだ書物の女主人公たち」が口にした憧れの「美しい」文句を，今は自分がその女主人公になったかのように，再び口にしているのだと感じているのである。だからこそ，「エンマ自身もこうした空想の女たちのまぎれもない一部となったのだ」という記述があるのである。

B．エンマの決定的体験

ここまでくれば，もはや，先に述べた「パリへの夢」の場合とはいささかその事態が異なることは明らかであろう。エンマは，単に言葉それ自体の「美しい」響きに物神崇拝的に魅了されているというだけではなく，そうした言葉が位置している「虚構の世界」に限りなく魅了されているのである。もちろん，その世界とは，エンマが修道院時代に隠れて貪り読んだ小説や贈答用絵本《keepsake》などによって形成された世界である。つまり，

Ce n'étaient qu'amours, amants, amantes, dames persécutées s'évanoussant dans des pavillons solitaires, postillons qu'on tue à tous les relais, chevaux qu'on crève à toutes les pages, forêts sombres, troubles du coeur, serments, sanglots, larmes et baisers, nacelles au clair de lune, rossignols dans les bosquets,

messieurs braves comme des lions, doux comme des agneaux, vertueux comme on ne l'est pas, toujours bien mis, et qui pleurent comme des urnes. (p.38)

「(小説の中に出てくるのは) おきまりの恋愛沙汰に，恋する男と恋する女。さらに，薄命の佳人は寂しい離れ家に気を失い，馭者は宿場へ着けば必ず殺され，馬は各ページごとに乗り潰される。小暗い森や胸の乱れ，誓い，啜り泣き，涙，口づけ，さては月下の小舟に，茂みで鳴く夜鶯。さらには獅子のように猛く，子羊のように優しく，美徳は衆に優れ，いつもりゅうとしたいでたちで，泣けばさめざめと泣く『殿方』であった。」

というような，登場人物や舞台背景からなる世界である。これは，明らかに，ロマン派の常套句そのものであろう。事実，この小説にあっては，『ポールとヴィルジニー』から始まって，シャトーブリアン，ウォルター・スコット，さらにはフローベール自身が心底嫌っていた[4] ラマルチーヌまでが，エンマが少女時代に好んで読んだものとして明記されているのである。

ところで，上の引用で示されたような世界とは，フローベールがその書簡の中で，「この二日間，若い娘の夢想に入り込もうと努力しています。そのため，お城だとか，ビロードの縁無帽に白い羽を飾った吟遊詩人だとかという文学の乳白色の海を航海中」[5] と，半ば揶揄しながら言っているように，それ自体は，きわめて陳腐であって，お決まりのパターンに枠づけられた愚劣さそのものとさえ言える代物であろう。

しかし，われわれにとって重要なことは，エンマが人生の最初の時期にそうしたものにすっかり魅了されてしまい，しかもそうした「きわめて愚劣なもの」を通して，ある意味では人生の真実を学んでしまったということである。少女時代のエンマに関して，フローベールは以下のように記している。

A la classe de musique, dans les romances qu'elle chantait, il n'était question que de petits anges aux ailes d'or, de madones, de lagunes, de gondoliers, pacifiques compositions qui lui laissaient entrevoir, à travers la niaiserie du style et les imprudences de la note, l'attirante fantasmagorie des réalités sentimentales. (p.39) (c'est nous qui soulignons)

「唱歌の時間にエンマの歌う小曲にでてくるのは，金の翼の小天使，聖母像，入江，ゴンドラの船頭どもばかりであった。しかし，この泰平な歌は，愚にもつかぬ文句と突飛な節を通して，それでも彼女の心に，甘美な感傷を誘うさまざまな物からなる魅力ある魔法幻燈を垣間見せてくれた。」(傍点筆者)

例え「愚にもつかぬ文句」であるにせよ，そうしたものを通して「甘美な感傷を誘うさまざまな物からなる魅力ある魔法幻燈」を見てしまったことが，少女エンマの心に決定的だったのである。フローベールは，第一部第六章のほぼ全体にわたって，そうしたものにすっかり魅了され，時には呪縛されてしまったとさえ言えるような，修道院時代のエンマの姿を事細かに描いている。

もちろん，この決定的な体験は，少女時代にとどまらず，成人した後にもその影響を強く及ぼし続けることは言うまでもない。事実，修道院を出た後も，エンマの人生は，少女時代に垣間見たこの「魅力ある魔法幻燈」との距離を測ることに終始するであろう。つまり，「魅力ある魔法幻燈」をまさに自分の手に入れたと思うことで高揚したかと思うと，次の瞬間には，実際には手に入れてはいなかったのだと悟って幻滅する，ということの繰り返しなのである。その典型が，この論文の冒頭に引用した，「結婚するまで，エンマは恋をしているものと信じていた。しかし，その恋から当然くるはずの幸福がこないのは，自分の思い違いだったに相違ないと考えた」(傍点筆者) という一節であり，あるいは，この一節に直接関係した以下のような箇所である。

[...] l'irritation causée par la présence de cet homme[=Charles], avait suffi à lui faire croire qu'elle possédait enfin cette passion merveilleuse qui jusqu'alors s'était tenue comme un grand oiseau au plumage rose planant dans la splendeur des ciels poétiques; —et elle ne pouvait s'imaginer à présent que ce calme où elle vivait fût le bonheur qu'elle avait rêvé. (p.41) (c'est nous qui soulignons)

「シャルルという男の存在による刺激，ただそれだけで，エンマは，いままで大きなばら色の鳥のように輝かしい詩の天空にのみ翔っていたあの素晴らしい情熱を，いよいよわがものにしたのだと思い込んだ。——しかし結婚した今となっては，自分の生活の平穏無事さが，昔憧れていたあの幸福であろうとは思えなかった。」(傍点筆者)

エンマがこうした落差感を抱くというのもすべて少女時代に生じた「決定的な体験」の結果なのである。そのため，時には，既に人生そのものをすべて経験してしまったかのような錯覚に捕われることさえある。

Quand Charles vint aux Bertaux pour la première fois, elle se considérait comme fort désillusionnée, n'ayant plus rien à apprendre, ne devant plus rien sentir. (p.41)

「シャルルが初めてベルトーを訪ねてきた頃，エンマはひとかど人生の裏を見てしまったつもりで，いまさら何も知るべきことはなく，改めて感じてみるほどのものもないと思っていた。」

もとより，そうは言いながら，シャルルが目の前に現れると，エンマはそんなことをすっかり忘れて，新たな経験に，例え一時的にせよ，夢中になってしまうのは，拙論の第一節でしばしば強調した[6]ように，「夢が自分の現在をすっかりバラ色に変えてくれるとは思っていないにも拘らず，それでもなお，自分を取り巻いている凡庸さを直視しないために，夢にすがりつく」からである。

C．紋切型の強度に満ちたイメージ

ところで，エンマの心に強い影響を及ぼした決定的体験とは，先にも触れたように，小説や贈答用絵本などを読むことで得られた，広い意味での文学体験である。その具体的な中身と言えば，これまでの幾つかの引用で明らかなように，「小暗い森」や「月下の小舟」などの道具立ての中に，「恋する男に恋する女」や「薄命の佳人」が登場し，その間を勇敢な騎士である「殿方たち」が死をも恐れずに駆け巡るという内容のものである。明らかに，そこには，先に引用したフローベールの書簡中の言葉に従えば，「お城だとか，ビロードの縁無帽に白い羽を飾った吟遊詩人だとか（が必ずや登場してくる）」ような，ロマン派的な紋切型そのものの羅列としか言いようのない世界が展開されている。

したがって，エンマの心の中で，このような常套句から成る小説的世界が，彼女が憧れる理想の恋愛，理想の男性，理想の世界の原型として君臨することになるのも当然であろう。そのため，エンマは，この原型に忠実に恋愛をし，忠実な結婚生活を営むことを願う。しかし，その結果として，味わうものは，その原型との甚だしい落差感であり，幻滅感である。つまり，理想と現実との大きな距離感である。

[...] d'après des théories qu'elle croyait bonnes, elle voulut se donner de l'amour. Au clair de lune, dans le jardin, elle récitait tout ce qu'ell savait par coeur de rimes passionnées et lui chantait, en soupirant des adagios mélancoliques; mais [...] Charles n'en parassait ni plus amoureux ni plus remué. (p.45)

「エンマは，自分の正しいと信じている理論どおりに恋を感じようとした。庭へ出て月の光を浴びながら，覚えている限りの情熱的な詩句を朗吟し，吐息しながら憂鬱なアダジオを夫に歌って聞かせた。しかし（...）シャルルは一向に恋心を起こす様子もなく，わくわくする気色も見えなかった。」

「一向に恋心を起こす様子もな(かった)」シャルルに対して，例えば，ロドルフとは，第二部第八章全体にわたって展開される農業共進会での誘惑場面で明らかなように，何よりもまず，エンマが「正しいと信じている理論どおり」に，女を口説くことができる存在なのである。例えば，最初の逢い引き場面でエンマはロドルフの乗馬姿にすっかり魅了される。しかし，それもすべてロドルフの計算のうちである。というのも，ロドルフは，エンマを魅了しようと目論んで，彼女が「正しいと信じている理論どおり」の服装をしてきたからである。

Rodolphe avait mis de longues bottes molles, se disant que sans doute elle n'en avait jamais vu de pareilles; en effet, Emma fut charmée de sa tournure, lorsqu'il apparut sur le palier avec son grand habit de velours et sa culotte de tricot blanc. (p.162)

「ロドルフは柔らかい長靴をはいていた。あの女は，これまでに，こんなものを見たことはあるまいとロドルフは思った。果して，彼が大きなビロード服に白い毛編みのズボンをはいて階段の上に現れた時，エンマはその風采に魅せられた。」

ロドルフがエンマの心をあんなにも簡単に捕えてしまったのは，この引用例が示すように，彼がエンマの理想の型に精通していたからである。それに対して，シャルルがエンマとの結婚生活を充分に享受することができなかったのは，ひとえに，彼がエンマのそれを熟知していなかったからである。そもそも，シャルルがエンマとの結婚を決める際も，彼は，ロドルフが農業共進会で口にする誘惑者お決まりのセリフとはまったく異なり，エンマ自身に直接プロポーズするわけでもなく，ルオー爺さんの前で，ただひたすら《Père Rouault..., père Rouault...,》(p.29)「ルオーさん... ルオーさん...」と口ごもるばかりではなかったか。したがって，《incapable [...] de croire à tout ce qui ne se manifestait point par des formes convenues》(p.45)「すべて紋切型に現れてこないものは信じられない」エンマであれば，あっさりとシャルルを見限ってしまうのも当然であろう。

ところで，こうした紋切型からなる世界にエンマの意

識がいかに捕われてしまっているかをよく表している一節を以下に引用したい。もはやここまでくると，単なる滑稽さを越えて，奇妙な何物かを指し示しているように思われるからだ。いささか長くなるが煩を厭わず引用したい。

Elle[＝Emma] n'en continuait pas moins à lui[＝à Léon] écrire des lettres amoureuses, en vertu de cette idée, qu'une femme doit toujours écrire à son amant.

Mais, en écrivant, elle apercevait un autre homme, un fantôme fait de ses plus ardents souvenirs, de ses lectures les plus belles, de ses convoitises les plus fortes; et il devenait à la fin si véritable, et accessible, qu'elle en palpitait émerveillée, sans pouvoir néanmoins le nettement imaginer, tant il se perdait, comme un dieu, sous l'abondance de ses attributs. Il habitait la contrée bleuâtre où les échelles de soie se balancent à des balcons, sous le souffle des fleurs, dans la clarté de la lune. (p.296-297)

「エンマはそのくせ，女というものは必ず恋人に手紙を出さねばならぬという考えから，依然としてレオンに恋文を書き続けた。

けれども書いているうちに，ほかの男の姿が見えてきた。それは，彼女の最も輝かしい思い出と，最も美しい読書と，最も強い欲望とから作り出されたまぼろしであった。それはついには生きた人のようになり，手を差しのべれば届きそうになった。彼女は感嘆して胸ときめかした。だが，神がさまざまな属性に取り囲まれてさだかに姿を示さぬように，このまぼろしの男もはっきり姿を描くことができなかった。まぼろしの男は青白い国に住んでいた。そこには花の息吹きの下に月の光を浴びながら，絹の縄梯子が露台に揺れていた。」

エンマは，恋愛の紋切型に従って，相手に恋文を書いているうちに，実際の相手であるレオンから次第に離れ，やがて「美しい」言葉だけからなる「まぼろしの男」を作り上げてしまう。そしてそこにあらゆる属詞形容詞を，しかもその最上級の形で付け加えることになる。すなわち，「彼は最も美しく，最も立派で，最も上品で，最も勇敢で……」という具合に。だが，あまりに多くの属性に取り囲まれてしまったために，かえって，この男はその輪郭が漠然としてしまう。そのため，この男は「はるかかなたの夢の国」の住人にふさわしくきわめて曖昧な存在へとなってゆく。

さらに面白いことがこの一節にある。それは，紋切型の言葉でエンマの頭の中が一杯になっているために，「青白い国」から「花の息吹き」，「月の光」，「絹の縄梯子」とその舞台設定までがあまりに細部にわたって記述されていることである。「まぼろしの男」にあらゆる属詞形容詞が伴うように，この男の住む世界も，実に細かい名詞，形容詞，さらには「揺れていた」という動詞に至るまで，あらゆる種類の言葉で充満しているのだ。

これは，われわれが，先の拙論において，エンマがパリでの生活を夢想する場面において記述したこと[7]とほぼ同様な事態と言えるだろう。エンマにとってのパリが，「都会という言葉が通常想像させるあらゆる夢が存在している場所，いわば抽象名詞に近いもの」であったと同様に，この場合も，考えられるあらゆる名詞，形容詞，動詞などがこの「まぼろしの男」とその世界に付随しているために，それらがきわめて抽象的なものとなってしまっているのである。したがって，どちらの場合も，「あまりにも鮮明に夢見られた細部の連続なのであ(り，それに)ふさわしい全体像が徹底して欠けている」状態なのである。

だが，われわれはその先を考えてみたい。というのも，エンマは，「まぼろしの男」を書き進めるにつれて，以下のような状態になるからだ。

Elle le sentait près d'elle, il avait venir et l'enlèverait tout entière dans un baiser. Ensuite elle retombait à plat, brisée; car ces élans d'amour vague la fatiguaient plus que de grandes débauches. (p.297)

「エンマはその男を身近に感じた。彼は今にもやってきて，たった一度の口づけで彼女のすべてを奪い去ろうとする。やがてエンマは疲れ切ってバッタリ倒れた。はかない空想の恋のあがきは，激しい肉のたわむれ以上に彼女を疲労させたのである。」

エンマは，このように，無数の常套句の重なりから立ち上がってくる，強度に満ちたイメージの幻想世界にすっかり取り囲まれてしまう。しかも，そうした言葉を連ねれば連ねるほど，ますます幻想の世界にのめり込んでゆく。この時，現実と非現実との境界はもはや崩壊し，彼女は一種の幻視者のように，「まぼろしの男」にレオン以上の強い実在感を抱き始めるのである。これはもはや単なる夢とは言えないであろう。夢という言葉が一般的に連想させるあらゆるものを越えた地点で，エンマは夢見ているのだ。おそらく，これが「甘美な感傷を誘うさまざまな物からなる魅力ある魔法幻燈」の正体なのではないだろうか。これらは，エンマにとって，現実以上に

現実的な存在として位置しているのだ。

そもそも，こうした「幻視的」場面は，エンマにおいては，かなり頻繁に生じている。例えば，第二部第十二章において，《elle se réveillait en d'autres rêves》(p.201)「彼女はほかの夢想に目覚めるのであった」という文章から始まる，ロドルフとの逃避行を夢見る場面。あるいは，第二部第十五章でのオペラ観劇の場面。とくに，このオペラ場面では，芝居に夢中になったエンマが，次第に幻想の世界にのめり込み，ついには，主演役者が彼女だけのために歌っていると勝手に思い込み始めてしまうのである。

Mais une folie la saisit: il la regardait, c'est sûr! Elle eut envie de courir dans ses bras pour se réfugier en sa force, comme dans l'incarnation de l'amour même, et de lui dire, de s'écrier:《Enlève-moi, emmène-moi, partons! A toi, à toi! toutes mes ardeurs et tous mes rêves!》(p.232) (c'est nous qui soulignons)

「その時，彼女は狂気に似た思いに捕われた。あの人は自分を見つめている。確かにそうだ！ 彼女は彼の腕に飛び込んで，彼の力の中へ，恋愛そのものの化身の中へ逃れたく思った。そして彼に向かって，「私を連れ出して頂戴，連れて逃げて頂戴，さあ行きましょう！ 私の情熱も，私の夢もみんなあなたのものよ」と言いたかった，叫びたかった。」（傍点筆者）

このような「狂気すれすれの状況」の中で，エンマは，現実以上に現実である「魅力ある魔法幻燈」を垣間見ているのである。明らかに，こうしたものが彼女の生きる糧になっているのだ。

D．「空虚な夢」と「充実した夢」

ところで，今さら言うまでもないことだが，夢を見るのはエンマばかりではない。この作品では，多くの人物が，その強度の違いはあるにせよ，エンマと同様に，夢想に耽る。[8] 例えば，シャルル。彼は，ルーアンで辛い学生生活を送っている頃，窓辺にひじをついては，次のように夢想していたはずだ。

Qu'il devait faire bon là-bas! Quelle fraîcheur sous la hêtrée! (p.11)

「あのあたりへ行ったらどんなにいい気持ちだろう！ ぶなの木陰はどんなにか涼しいことだろう！」

しかし，シャルルは，エンマのそれにも似た「現実からの脱出」を夢想しながらも，実際には，現実の平板な世界に住み続けるのである。あるいは，時には，自分の過去を夢想して，

Jusqu'à présent, qu'avait-il eu de bon dans l'existence? Etait-ce son temps de collège [...]? Etait-ce plus tard, lorsqu'il étudiait la médecine [...]? (p.35)

「一生のうち，今日まで楽しかったことと言えば何だろう！ それは（...）学生時代だったろうか。それとも，その後医学の勉強をしていた（...）あの頃だろうか？」

と述懐することがあるにせよ，シャルルは，先の論文でも詳述したように[9]，「雪の日も雨の日も規則正しく自分の仕事を果す」のであり，まさに「平板で退屈な田舎の生活にしっとりと根を下ろして」生活しているのである。

したがって，ロマン派的な紋切型のイメージと例えどんなに強く結びついていようとも，エンマが，シャルルと同様に，こうした茫漠たる夢想の世界をただ思い描くことのみに終始していたならば，彼女の苦しみは生じなかったであろう。というのも，例えそれ自体はきわめて愚劣なものであったとしても，その夢想を夢想のままに，言い換えるならば，ひとつの虚構のまま，ひそかな心の拠り所として自分の心の奥深くに留めておいたならば，彼女の心は，そしてその人生はそれなりに平穏であったろうと思われるからである。その時，彼女は，上に引用したシャルル，あるいは幸福だった昔を時折夢想するルオーじいさん[10]と同じく，「現実と夢」という静かな二項対立の中で穏やかに生きることになるであろう。

事実，エンマも，例えば，ラガルディー主演のオペラを見ながら，次のように考える時もあるのだ。

mais ce bonheur-là, sans doute, était un mensonge imaginé pour le désespoir de tout désir. Elle connaissait à présent la petitesse des passions que l'art exagérait. S'efforçant donc d'en détourner sa pensée, Emma voulait ne plus voir dans cette reproduction de ses douleurs qu'une fantaisie plastique bonne à amuser les yeux [...] (p.230-231)

「しかし，こうした幸福は，おそらく，すべての欲望が現実では到底かなえられないがために考え出された嘘いつわりなのかもしれない。彼女は今では芸術によって誇張された情熱のくだらない正体を知っていた。そこでエンマは（舞台の感動に引き込まれないように）考えをほかへそらそうと努めながら，（さっきまで）自分の苦悩を再現した（と思われていた）このオペラ

を，単に目を楽しませるだけの，ごてごて飾り立てた絵空事とのみ見ようとした。」

ところが，エンマは，少女時代に決定的な体験をして「魅力ある魔法幻燈」を垣間見てしまい，それが，いわば，彼女の生きる糧のようになってしまった存在である。このような人物が，歌劇という，紋切型に包まれた魅惑的な物語を目の前にして，いつまでもそのような醒めた認識に止まっていられるであろうか。事実，エンマはすぐに先ほどの冷静な認識を忘れてしまう。

Toutes ses velléités de dénigrement s'évanoussaient sous la poésie du rôle qui l'envahissait, et, entraînée vers l'homme par l'illusion du personnage, elle tâcha de se figurer sa vie [...] (p.231)

「この役の持つ詩的魅力におかされると，彼女はこの歌劇をけなそうとする気持ちがすべて薄れてきた。役柄の与える幻影によって，俳優その人にひきつけられた彼女は，その人の生活振りを想像しようとした。」

その結果，再び強烈な幻想のイメージに覆われてしまうのは言うまでもない。それどころか，幻想の世界にますますのめり込み，エンマは，ついに，「狂気にも似た思いに捕われ」てしまうのである。明らかに，エンマは，「現実と夢」という静かな二項対立の中で，その生を平穏に送ることができないのである。「まぼろしの男」の例で明らかなように，エンマにあっては，現実と夢とが均等に存在しているというのではなく，夢の方が現実を質的にも量的にも遥かに凌駕してしまっているのである。

しかしながら，エンマは，既に指摘したように[11]，きわめて実際的な心の持主でもあり，明晰な認識力さえもっている人物でもある。それゆえ，「魅力ある魔法幻燈」にこのようにすっかり魅せられながら，同時にそこに，現実とこの「魔法幻燈」との間の甚だしい落差感をも，大きな幻滅感と共に，絶えず意識せざるを得ないのである。そのため，その乖離を埋めようとして，第一部第五章末尾にあるように，「物の本で読んだ時あれほど美しく思われた言葉を，世間の人は本当はどんな意味に使っているのかを知ろう」とするのである。かくして，エンマは，言葉の指示対象《référent》を「世間」という現実世界の中にしきりに《探索する存在》として，その姿を私達の前に現すのである。[12]

おそらく，ここにこそ，エンマの本当の悲劇があるのだ。「魅力ある魔法幻燈」を垣間見るという決定的な体験をしたことが本当の悲劇なのではない。「魅力ある魔法幻燈」の指示対象を至る所で激しく，しかも明晰な認識力と共に追い求めざるを得なかったことが悲劇なのである。例えば，シャルルならば，

Mais, à présent, il possédait pour la vie cette jolie femme qu'il adorait. L'univers, pour lui, n'excédait pas le tour soyeux de son jupon [...] (p.35)

「ところが今こそ，最愛のあの美人を永久にわがものとしてしまったのだ。シャルルにとっては，宇宙とは，エンマのペチコートの絹柔らかな内側を越えるものではなかった。」

というように，エンマの柔らかいペチコートの中にすっぽり包まれてしまい，一種の冬眠状態に入ってしまうのである。もはやここでは若い頃に抱いた脱出の夢などすっかり忘れられている。ところが，エンマは，ある意味では，シャルルが「冬眠している」柔らかいペチコートの中までも，本当にここが以前あれほど夢見た安楽の場なのかどうかと，明晰な判断力や認識力を駆使して，しきりに《探索》して止まない存在なのである。その時，もしかしたら，そのペチコートに小さな穴が幾つか開いていることに，あるいはそれが実際には本当の絹ではないことに気がつくかも知れない。そうなると，もはやエンマには耐えられないのである。

これは，言ってみれば，シャルルが半ば冬眠しながら，いわば「空虚な夢」に耽っている時に，エンマは，普通以上に目を見開いて「（現実以上に）堅固で充実した夢」を現実世界の中に追い求めているといった状態である。しかも，絶えず追い求めるがゆえに，逆に，エンマはその落差感に人一倍苦しめられることになる。

Elle eut envie[...]de lui dire, de s'écrier: 《Enlève-moi, emmène-moi, partons! A toi, à toi! toutes mes ardeurs et tous mes rêves!》

Le rideau se baissa.

L'odeur du gaz se mêlait aux haleines[...] (p.232)

「彼に向かって，「私を連れ出して頂戴，連れて逃げて頂戴，さあ行きましょう！ 私の情熱も，私の夢もみんなあなたのものよ」と言いたかった，叫びたかった。

幕が下りた。

ガスの臭いが人々の息に交じっていた。」

「魅力ある魔法幻燈」による夢の世界にすっかり取り囲まれたと思った瞬間，エンマはストーンと，「ガスの臭いが鼻を衝く」平板な現実の世界に引き戻されてしま

う。きわめて高揚した次の瞬間には，それ以上の深い幻滅を味わってしまうことになる。というのも，明晰な認識力のあるエンマは，高揚した狂気状態のまま，永遠に夢の幻想世界に住むことができないからである。あくまでも「狂気にも似た思い」に「一時的に」捕われてしまうだけなのである。

とは言え，先の引用文中のシャルルのように，思考停止の状態のまま，現実に根を下ろし，そこにすっかり安住するということもできない。かと言って逆に，あのロドルフのように，《L'éternelle monotonie de la passion, qui a toujours les mêmes formes et le même langage》(p.196)「情欲というものは永遠に単調なままであって，その形も言葉も少しも変わらない」という幻滅感を抱きながら，醒めた思いのまま生きることもできない。なぜなら，エンマは，何度も言うように，「魅力ある魔法幻燈」を垣間見てしまったからである。

それゆえ，エンマの願いとは，あくまで現実世界にしっかりと根差しながらも，それをはるかに凌駕するような堅固で充実した夢想の世界に居続けることである。これは，明らかに不可能な願いである。しかし，この不可能なことをまさに彼女は絶えず望んでいたのだ。

E．まとめ

われわれは，この論文の第一節（先号の紀要に掲載），および第二節の出発点として，ともに，第一部第五章末尾の一節を引用し，それにさまざまな角度から説明を加えるという形で論を進めてきた。それは，この箇所で，初めてわれわれの前にエンマの心の中が開示されるからであるが，それだけではない。この一節には，彼女の今後の生を規定する存在形態とでも言うべきものがはっきり現れているからである。

それは，まず，「当然くるはずの幸福がこない」ために「それらを空しく待つ」徹底的に受身的な存在[13]としてのエンマである。と同時に，もうひとつの存在形態。すなわち，書物の中で魅力ある幻影を振り撒き，彼女の心に幸福への夢を激しく駆り立てる「美しい」言葉が現実の中ではいったいどのような位置を占めるのか，と執拗に《探索する存在》としてのエンマである。言い換えれば，「受動的な夢想家エンマ」と「能動的な実際家エンマ」という相反する二つの存在形態である。かくして以後は，この二つの軸が彼女の内部で互いに他を牽制し合い，刺激し合って彼女の生を進ませることになるだろう。次の第三節（次号の紀要掲載予定）では，このような角度からエンマの生の軌跡を詳しくたどってみるつもりである。

註

(1) 大貫徹『ギュスターヴ・フローベール研究(2)』（名古屋工業大学紀要第43巻，1992年3月，84頁）

(2) 大貫前掲論文，85頁－86頁。

(3) 実際，山田爵は，『ボヴァリー夫人』のこの一節を以下のように訳している。

> 中世の物語に出てくるようなガルシュアンドも捨てがたかったし，イズーやレオカディーはいっそう気に入った。（『世界の文学』第15巻　フロベール［中央公論社，1965年，93頁］）

(4) 例えば，フローベールは，その当時の愛人であったルイーズ・コレ宛に書いた手紙（1852年4月24日土曜日夕方）の中で，ラマルチーヌを以下のように罵倒している。

> おお，偽善者よ！［...］真実を語るには，ド・ラマルチーヌ氏なんかよりもっと毛むくじゃらの男が必要です。［...］しかしこうした（真実の）本を書くには，ラマルチーヌにはない人格の独立性，人生を見通す医学的なまなざしが必要です。つまり，真実を見抜く力なんですが，ただこれのみが，力強い効果で感動を呼び起こす手段なのです。
> (Gustave Flaubert, *Correspondance*, édition présentée, établie et annotée par J.Bruneau, Gallimard,《Bibliothèque de la Pléiade》, 1980, t.II, p.77-78)

この引用文にもあるように，フローベールは，とりわけ，ラマルチーヌが書く「真実ではない小説」，すなわち「虚偽の小説」を嫌っていたようだ。フローベールの言う「虚偽の小説」とは，簡単に言えば，ロマン派的な紋切型に安易にもたれ掛かったお涙頂戴の小説ということになるであろう。なお，上に引用した手紙以外にも，例えば，1853年4月6日のルイーズ・コレ宛の手紙では，「ラマルチーヌがくたばりかけているんですってね。ぼくは彼の死を悼んで泣くつもりなんかありませんよ（...）。いやまったく，ぼくはあんなリズム音痴の作家，決断力のない政治家には，いかなる共感も抱かない。」（前掲書299頁）と言い切っているし，あるいは，同じ年の9月16日に書かれたルイーズ・コレ宛の手紙でも，以下のように，激しくラマルチーヌを批判している。

> ほかにいくらでも読み返すべきものがある時に，

どうして『グラジエラ』なんかを再び読んで時間を無駄にするんですか。これはまったく，気晴らしとしても許しがたい！ あんな作品には学ぶべきものは何もありません。われわれは，『泉の水』だけをたよらなくちゃいけないのに，ラマルチーヌは水道ですよ。（前掲書 432 頁）

(5) Ibid., p.56, 3 mars 1852, à Louise Colet.

(6) 大貫前掲論文，87頁。

(7) 大貫前掲論文，86頁。

(8) 本文中に挙げたシャルルを除けば，まず，シャルルの母親。彼女は息子の輝かしい将来をひそかに夢見ては，その夢を実現すべくあらゆる障害を排除することに，そのエネルギーの多くを費やすことになるだろう。あるいはオメー(Homais)。彼もまた，シャルルの母親と同じく，名誉勲章を貰うことを夢見ては熱心に運動することになるであろう。さらには小間物商人ルウルウ（Lheureux)。彼はこの小説にあってはエンマを死へと追いやるのにきわめて大きな役割を果した人物なのであるが，実は，以下の引用に見られるように，かなりの野心家でもあるのだ。

Il[= Lheureux] était adjudicataire d'une fourniture de cidre pour l'hôpital de Neufchâtel; M. Guillaumin lui promettait des actions dans les tourbières de Grumesnil, et il rêvait d'établir un nouveau service de diligence entre Argueil et Rouen, qui ne tarderait pas, sans doute, à ruiner la guimbarde du *Lion d'or*, et qui, marchant plus vite, étant à prix plus bas et portant plus de bagages, lui mettrait ainsi dans les mains tout le commerce d'Yonville. (p.217)

「ヌウシャテルの病院へリンゴ酒を納める入札は自分の手に落ちるし，ギョーマン氏はグリュメニルの泥炭坑の株を分けようと約束してくれた。その上，ルウルウはアルグイユとルーアンの間に新しい乗合馬車を作ろうと夢想していた。きっとそれは間もなく『金獅子』のがた馬車をやっつけてしまうだろう。なにしろ速力はあるし運賃は安いし，それに荷物はたくさん積めるというのだから，ヨンヴィルの商取引はそのうち全部自分の掌中に帰してしまうだろう（と彼は夢想していた。）」

(9) 大貫前掲論文，87頁－88頁。

(10) ルオーじいさんは，結婚したばかりのエンマとシャルルを送って行く際に，以下のようなことを思い浮かべるのである。

Puis il se rappela ses noces, son temps d'autrefois, la première grossesse de sa femme; [...]lorsqu'il tournait la tête, il voyait près de lui, [...]sa petite mine rosée qui souriait silencieusement, sous la plaque d'or de son bonnet. [...] Comme c'était vieux tout cela! Leur fils, à présent, aurait trente ans! (p.32)

「そして自分の結婚式のこと，遠い昔のこと，妻が最初に妊娠した時のことを思い浮かべた。(...) 彼が振り向くと，そばに（...）妻の小さいばら色の顔があって，かぶりものの金の留め飾りの下で，黙ってほほえみかけていた。(...) それもみんな遠い昔のことだ！ 息子が生きていたらもう三十になっている！」

ルオーじいさんにとっては，こうした思い出は，年老いた今となっては，彼の心の拠り所とも言えるほど貴重なものであろう。とは言え，それは，あくまでも，時々夢想するに過ぎないものであって，現実のどこかにその具体的な対象物を求めようとするような種類のものではないのである。

(11) 大貫前掲論文，86頁－87頁。

(12) そもそも，「言葉の指示対象を探索する存在」としてのエンマとは，それがそのまま，ギー・ド・モーパッサン（Guy de Maupassant）の言うように，「『ある事柄を表現するには，ただ一つの言い方しかない。それを言い表すには一つの語しかない。それを形容するには一つの形容詞，それを動かすには一つの動詞しかない』という堅い信念にとりつかれたフローベール」（コナール版の『ボヴァリー夫人』，1930年，546頁から）とどこかで重なり合う部分があるのかも知れない。

しかし今はこの点には詳しく触れる余裕がない。ただここでは，次のことだけを指摘したい。エンマが言葉の指示対象を執拗に現実世界の中に探し求めようとするのは，本文でも強調したように，彼女が「実際的な心の持主であり，明晰な認識力さえもっている」からである。しかし同時に，彼女の中に，現実を単に否定するだけではなく，これを乗り越えては，現実以上に充実した堅固な夢想世界，つまり「魅力ある魔法幻燈」そのものを実際に得たいという強い願望があるからである。逆に言えば，（これまで何度も述べてきたように），それほど，彼女は自分を取り巻く現実に耐え切れない思いをしていたのだということになるのかもしれない。

その一方で，フローベールの方も同様な苦しみを味わっていたように思われる。ただし，彼の場合には，エンマとは異なり，平板な現実が（耐えられないほど）堅固に聳え立っているというよりはむしろ，現実が自分の足下で次第に埋没してしまう不安感に強く捕われていたようである。われわれが使用しているガルニエ版テキストの編者であるクロディーヌ・ゴト＝メルシュ（Claudine Gothot-Mersch）はその編者序文の中で次のように述べている。

フローベールにとって現実はその堅牢さを失っていた。世界はもはや古典主義時代のように完全に解読可能というものではなくなっており，自然は確かな秩序体ではなく（...）解体する一つの現実に過ぎない。（ガルニエ版テキスト，序文56頁から）

だからこそ一層，フローベールは，エンマが夢にすがりつくように，言語のみで形作られる，堅固な言語空間としての作品構築そのものに，いわば禁欲的に向かって行ったのではないだろうか。ロラン・バルト流に言えば，そうした行為を通して，「フローベールは，（...）価値＝労働の到来によって，文学を決定的に客体として形成した」（Roland Barthes, *Le degré zéro de l'écriture*, Paris, Seuil, 1953, coll.《Points》, p.9）ということになるのであろう。

(13) 大貫前掲論文，84頁。